

調査報告① (研究論文)

大場美和子

広島女学院大学

1. はじめに

◆ なぜ、研究論文の調査なのか

- ・ 日本語教育において、どのような会話データ分析が行われているのか？
- ・ 分析結果は現場でどのように活用されてきているのか？

具体的に調査して明らかにしたい。

◆ 学会誌『日本語教育』創刊号から150号において会話データ分析を行う研究論文

- 1) どのような研究が行われているか
- 2) 研究成果の実践現場での活用についてどのように言及しているか

2. 調査概要

学会誌『日本語教育』創刊～150号の分類
掲載論文（全1611本）

研究論文
(1158本)

実践研究論文
(191本)

その他
(262本)



会話データ分析を行っている論文171本を認定

3. 会話データ分析を行う論文の分析

3. 1 会話データ分析論文数

3. 2 分析データの場面

(母語場面、接触場面)

3. 3 分析データの種類と項目

3. 4 実践現場への活用

3. 会話データ分析を行う論文の分析

3. 1 会話データ分析論文数

3. 2 分析データの場面 (母語場面、接触場面)

3. 3 分析データの種類と項目

3. 4 実践現場への活用

学会誌『日本語教育』創刊～150号の分類 掲載論文（全1611本）

研究論文
(1158本)

実践研究論文
(191本)

その他
(262本)



会話データ分析を行っている論文171本を認定

3. 1 会話データ分析論文数

年代	①掲載論文数	②研究論文数		③会話データ分析論文数	
1960年代	58	51	87. 9%	0	0. 0%
1970年代	250	214	85. 6%	7	3. 3%
1980年代	390	317	81. 3%	24	7. 6%
1990年代	442	367	83. 0%	75	20. 4%
2000年代	401	192	47. 9%	59	30. 7%
2010年代	70	17	24. 3%	6	35. 3%
合計	1, 611	1, 158	71. 9%	171	14. 8%

3.1 会話データ分析論文数

年代	①掲載論文数	②研究論文数		③会話データ分析論文数	
1960年代	58	51	87.9%	0	0.0%
1970年代	250	214	85.6%	7	3.3%
1980年代	390	317	81.3%	24	7.6%
1990年代	442	367	83.0%	75	20.4%
2000年代	401	192	47.9%	59	30.7%
2010年代	70	17	24.3%	6	35.3%
合計	1,611	1,158	71.9%	171	14.8%

3. 会話データ分析を行う論文の分析

3. 1 会話データ分析論文数

3. 2 分析データの場面
(母語場面、接触場面)

3. 3 分析データの種類と項目

3. 4 実践現場への活用

3.2 分析データの場面

年代	会話 データ 分析 論文数	分析データ場面					
		母語場面		接触場面		両場面	
1960年代	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
1970年代	7	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%
1980年代	24	12	50.0%	7	29.2%	5	20.8%
1990年代	75	39	52.0%	14	18.7%	22	29.3%
2000年代	59	30	50.8%	13	22.0%	16	27.1%
2010年代	6	3	50.0%	2	33.3%	1	16.7%
合計	171	90	52.6%	37	21.6%	44	25.7%

3.2 分析データの場面

- ・80年代から接触場面の研究が増加

	データ数	分析データ場面					
		母語場面		接触場面		両場面	
1960年代	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
1970年代	7	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%
1980年代	24	12	50.0%	7	29.2%	5	20.8%
1990年代	75	39	52.0%	14	18.7%	22	29.3%
2000年代	59	30	50.8%	13	22.0%	16	27.1%
2010年代	6	3	50.0%	2	33.3%	1	16.7%
合計	171	90	52.6%	37	21.6%	44	25.7%

3.2 分析データの場面

- ・母語場面も
半数を占める。

		分析データ場面					
		母語場面		接触場面		両場面	
1960年代	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
1970年代	7	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%
1980年代	24	12	50.0%	7	29.2%	5	20.8%
1990年代	75	39	52.0%	14	18.7%	22	29.3%
2000年代	59	30	50.8%	13	22.0%	16	27.1%
2010年代	6	3	50.0%	2	33.3%	1	16.7%
合計	171	90	52.6%	37	21.6%	44	25.7%

3. 会話データ分析を行う論文の分析

3. 1 会話データ分析論文数

3. 2 分析データの場面

(母語場面、接触場面)

3. 3 分析データの種類と項目

3. 4 実践現場への活用

分析データの種類

データの種類	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代以降	小計	計
メディア	6	10	20	11	47	134
自然談話	0	8	21	17	46	
実験	0	1	14	14	29	
作例	1	2	3	0	6	
コーパス	0	0	0	5	5	
記載なし	0	0	1	0	1	37
複合	0	3	16	18	37	
合計	7	24	75	65	171	171

分析データの種類

データの種類	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代以降	小計	計
メディア	6	10	20	11	47	134
自然談話	0	8	21	17	46	
実験	0	1	14	14	29	
作例	1	2	3	0	6	
コーパス	0	0	0	5	5	
記載なし	0	0	1	0	1	37
複合	0	3	16	18	37	
合計	7	24	75	65	171	171

70年代の特徴

年代	会話 データ 分析 論文数	分析データ場面					
		母語場面		接触場面		両場面	
1960年代	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
1970年代	7	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%
1980年代	24	12	50.0%	7	29.2%	5	20.8%
1990年代	75	39	52.0%	14	18.7%	22	29.3%
2000年代	59	30	50.8%	13	22.0%	16	27.1%
2010年代	6	3	50.0%	2	33.3%	1	16.7%
合計	171	90	52.6%	37	21.6%	44	25.7%

分析データの種類

小説、漫画、テレビ番組、作例の会話、教材の会話、
など

分析項目

日英の対訳における接続や文末表現の違い
(田辺1974)、「～と、～って」(三浦1974)、応答詞(北
川1977)、疑問詞の用法(三尾1979)

話し言葉の特徴の分析

80年代の特徴

年代	会話 データ 分析 論文数	分析データ場面					
		母語場面		接触場面		両場面	
1960年代	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
1970年代	7	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%
1980年代	24	12	50.0%	7	29.2%	5	20.8%
1990年代	75	39	52.0%	14	18.7%	22	29.3%
2000年代	59	30	50.8%	13	22.0%	16	27.1%
2010年代	6	3	50.0%	2	33.3%	1	16.7%
合計	171	90	52.6%	37	21.6%	44	25.7%

分析データの種類

接触場面の会話

自然談話の分析

分析項目

伝達技術(尾崎(1981)、フォリナー・トーク(スクータリデス1981)、聞き手の言語行動(堀口1988)、非言語行動(杉戸1989)、到達行動(田中他1983)、待遇行動(中道他1989)、など

話し言葉の体系性や規則性への注目

90年代の特徴

年代	会話 データ 分析 論文数	分析データ場面					
		母語場面		接触場面		両場面	
1960年代	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
1970年代	7	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%
1980年代	24	12	50.0%	7	29.2%	5	20.8%
1990年代	75	39	52.0%	14	18.7%	22	29.3%
2000年代	59	30	50.8%	13	22.0%	16	27.1%
2010年代	6	3	50.0%	2	33.3%	1	16.7%
合計	171	90	52.6%	37	21.6%	44	25.7%

分析データの種類

初対面・電話・ビジネスの会話、上級学習者・
理系の学習者・ビジネスピープルの会話、など

分析項目

終助詞「ね」と「よ」(伊豆原1993)、聞き返し(尾崎1993)、コ・ソ・アの習得状況(迫田1993)、あいづちの機能(大浜他1998)のほか、話題(三牧1999)、物語の終了・開始(李1998、1999)、など

実際の日常生活における多様な会話

多様化した学習者のニーズを反映した会話

2000年代以降の特徴

年代	会話 データ 分析 論文数	分析データ場面					
		母語場面		接触場面		両場面	
1960年代	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
1970年代	7	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%
1980年代	24	12	50.0%	7	29.2%	5	20.8%
1990年代	75	39	52.0%	14	18.7%	22	29.3%
2000年代	59	30	50.8%	13	22.0%	16	27.1%
2010年代	6	3	50.0%	2	33.3%	1	16.7%
合計	171	90	52.6%	37	21.6%	44	25.7%

分析データの種類

話し言葉のコーパスを利用した大量調査、
社会生活の需要を反映した研究

地域の日本語教育、医療、ビジネスの会話、など

分析項目

終助詞・文末表現（深尾2005、加藤2005）、あいづち（久保田2001、吉本2001）、フィラー（大工原2008）のほか、断り（伊藤2002、ルンティエーラ2004）、ほめ（金2005、山路2006）、など

専門化・詳細化

従来の会話データ分析の研究成果をふまえた研究

3.4 実践現場での活用

論文における実践現場での活用のありかたに関する言及の調査

→調査結果をエクセルにて提示

80年代

- ・ 会話データを見ることで明らかとなった結果を現場で活用する重要性を指摘する傾向にある。
- ・ カリキュラム開発、シラバス化、教材開発、コースデザイン、などの教育の用語とともに実践での研究成果の活用の必要性が主張されている。

90年代

- ・ 活用の方法の言及に多様性・個別性が出てくる。
- ・ 教材化、シラバスの言及だけでなく、個別的分野に関する提言も出てくる。

2000年代以降

- ・ 研究項目に関して個別に言及する傾向にある。
- ・ 個別的な提言と理念的な提言に分かれる傾向にある。



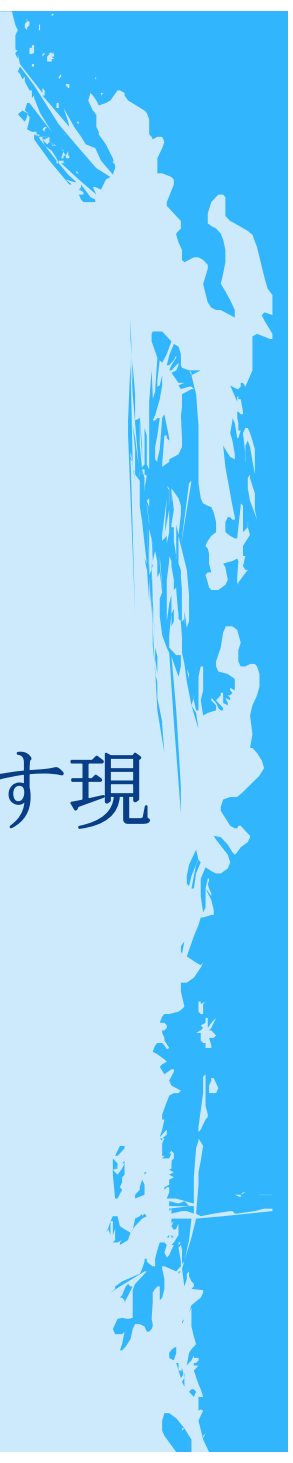
『中国からの帰国者のための生活日本語』

『外国人の疑問に答える日本語ノート』

(” Nihongo Notes”)

『改訂新版 新聞で学ぶ日本語 読んで話す現代の日本語』

→ 日本語の教材の例



4. まとめ・結論・提言

- ◆ 研究が詳細化・専門化することを反映して社会的貢献も多様化・個別化する傾向にある。
- ◆ 個別に現場で活用するだけでなく、日本語教育全体の中でその研究や実践での活用がどのような位置づけなのか見直す視点を持ってはどうか？
- ◆ 異なる分野の提言であっても、自分の現場で使用する可能性を探ってはどうか？

参考文献

- ◆ 伊豆原英子(1993)「「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80号, 103-114.
- ◆ 伊藤恵美子(2002)「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について—勧誘に対する「断り」行為に見られる工学系ブミプトラのポライトネス—」『日本語教育』115号, 61-70.
- ◆ 大浜るい子・山崎深雪・永田良太(1998)「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』96号, 73-84.
- ◆ 尾崎明人(1981)「外国人の日本語の実態(2) 上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45号, 41-52.
- ◆ 尾崎明人(1993)「接触場面の訂正ストラテジー—「聞き返し」の発話交換をめぐって—」『日本語教育』81号, 19-30.
- ◆ 加藤陽子(2005)「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124号, 43-52.
- ◆ 北川千里(1977)「「はい」と「えゝ」」『日本語教育』33号, 65-72.
- ◆ 金庚芬(2005)「会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』124号, 13-22.

参考文献

- ◆ 久保田真弓(2001)「聞き手のコミュニケーション上の機能としての「確認のあいづち」」『日本語教育』108号, 14-23.
- ◆ 迫田久美子(1993)「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81号, 67-80.
- ◆ 杉戸清樹(1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現—」『日本語教育』67号, 48-59.
- ◆ スクータリデス, A. (1981)「外国人の日本語の実態(3) 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45号, 53-62.
- ◆ 田中望・中畠孝幸・古川ちかし(1983)「外国人の日本語行動」『日本語教育』49号, 59-73.
- ◆ 大工原勇人(2008)「指示詞系フィラー「あの(一)」・「その(一)」の用法」『日本語教育』138号, 53-62.
- ◆ 田辺洋二(1974)「進んだ段階における話し言葉の指導—アメリカ人学習者に見られる問題点—」『日本語教育』23号, 9-26.

参考文献

- ◆ 中道真木男・畠郁・三枝令子・馬場良二(1989)「語の「対者的特徴」—対者的態度の表現の言語間比較—」『日本語教育』69号, 64-76.
- ◆ 深尾まどか(2005)「「よね」再考—人称と共起制限から—」『日本語教育』125号, 18-27.
- ◆ 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号, 13-26.
- ◆ 三浦昭(1974)「「と」と「って」」『日本語教育』24号, 23-28.
- ◆ 三尾真理(1979)「疑問詞とその用法」『日本語教育』36号, 73-90.
- ◆ 三牧陽子(1999)「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」『日本語教育』103号, 49-58.
- ◆ 山路奈保子(2006)「日本語の「ほめ」についての一考察—「ほめ」を攻撃的に作用させる要因の分析—」『日本語教育』130号, 100-109.
- ◆ 吉本優子(2001)「定住ベトナム難民における相づち習得の研究—談話展開の観点から—」『日本語教育』110号, 92-100.

- ◆ 李麗燕(1998)「日本語母語話者の雑談における「物語の終了」—物語を終了するために語り手が行う言語行動を中心に—」『日本語教育』96号, 85-96.
- ◆ 李麗燕(1999)「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」—物語を開始するために語り手が使う言語表現を中心に—」『日本語教育』103号, 59-68.
- ◆ ルンティーラ, ワンウィモン(2004)「タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から—」『日本語教育』121号, 46-55.